

キャリア開発学科の初年次教育に関する基礎的研究

— 「スタディ・スキル」「スチューデント・スキル」「基礎学力」を視点として—

岩田京子 酒見康廣 浦川安宏 大塚絵里子

An Introductory Study on First Year Education for the Career Development Division: Focus on Study Skills, Student Skills and Basic Academic Skills

Kyoko Iwata Yasuhiro Sakemi Yasuhiro Urakawa Eriko Otsuka

(2013年11月27日受理)

1. はじめに

1990年代より、はじめに授業に出席するものの自主的に学習することは皆無で、まるで中学生や高校生の「生徒」と変わらない態度で大学に在籍する「学生」たちの存在が指摘されている。伊藤(1997)はそれを「生徒化」と称し、かれらには①未熟性、②他律性・依存性、③一面性が見られるという。こうした「生徒化」した大学生を「学生化」するための教育(初年次教育)が多くの大学で必要とされている。

キャリア開発学科(以下、本学科)では初年次教育の重要性をいち早く認識し、取り組みを進めてきた。その経緯は前身の家政科の時代にさかのぼる。平成12年度に「大学基礎ゼミ」(必修・1単位)を教育課程に組み入れた。それは家政経済科と学科名を変更しても維持した。本学科設立の平成19年度からは、「大学基礎演習」(必修・1単位)と名前を改め、学科全教員の参画・教授によるオムニバス授業を実施している。さらに、平成26年度から新教育課程をスタートさせる予定だが、「大学基礎演習」は本学科の重要科目として必修の位置づけを変えてはいない。また、この間には、平成21年度(10H生対象)から入学前の12月から実施する「入学前教育」(ウォーミングアップスクーリング、のちにプレカレッジと改名)を開始した。大学教育へのすみやかな移行を目的としたものである。

本学科は10年以上にわたり初年次教育を実施してきたわけだが、この間に「制度疲労」がなかったとは言い切れない。学生の学力(低下と多様化)・態度、かれらを取り巻く社会・経済・雇用情勢は大きく変化している。初年次教育の内容についても抜

本的に見直す時期ではあるだろう。

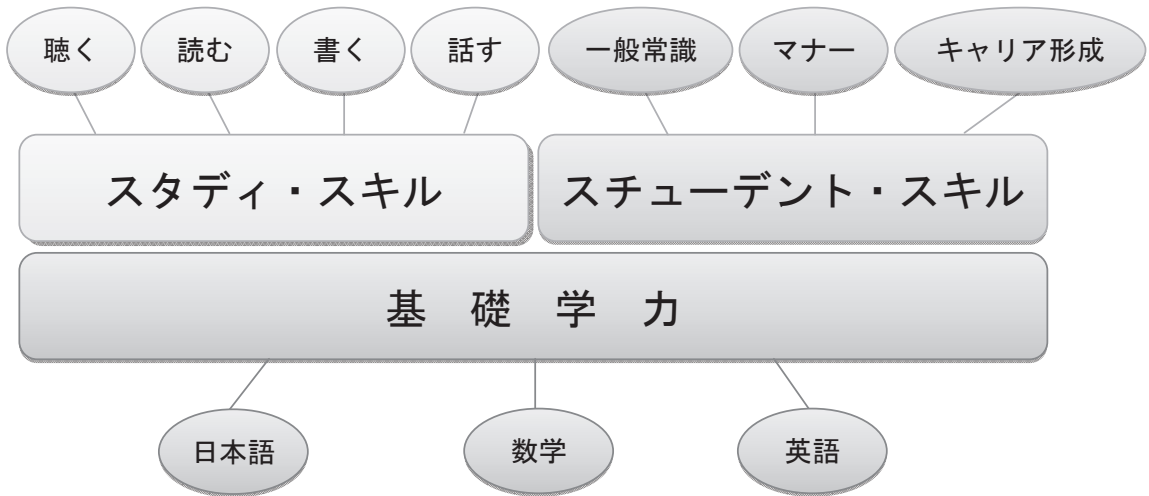
そこで、平成25年4月より初年次教育に関するプロジェクト研究を立ち上げ、新たな初年次教育の構築を目指すこととした。本報告はこれまでの議論を報告するためのものである。

2. 本学科初年次教育の枠組み

本学科の初年次教育は3つの側面、すなわち、「スタディ・スキル」、「スチューデント・スキル」、「基礎学力」の育成を目標とするものである(図表1参照)。「スタディ・スキル」とはレポート・論文の書き方、文献の探し方、コンピュータ・リテラシーの育成などがある。「スチューデント・スキル」は大学生としてふさわしいマナーや一般常識、進路への動機づけ・意欲を含むキャリア意識・形成が含まれる。また、「基礎学力」とは大学教育を受けるために必要な最低限の日本語・数学・英語とする。学生の確かな「基礎学力」の上に、「スタディ・スキル」「スチューデント・スキル」の修得が、充実した初年次教育に必要不可欠と考えている。

また、本学科の初年次教育の教育期間は図表2の通りである。通常、初年次教育は文字通りに大学の初年次(1年次)1年間ということになるが、本学科では、入学前(推薦入学試験合格後)から1年次前学期までを初年次教育の対象期間とする。この不規則な初年次教育期間を設定したのは、(1)短期大学は2年間という限られた教育期間であり、1年間も初年次教育をする時間的余裕がないこと、(2)推薦入学試験から入学までの約4カ月間の有効利用が大学、そして高等学校でも課題となっていること、がある。

図表1 キャリア開発学科の初年次教育



図表2 キャリア開発学科の初年次教育日程（平成24年度）

← キャリア開発学科・初年次教育期間 →								
11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
推薦入学試験 合格発表	第1回プレカレッジ	基礎学力問題①	一般入学試験 合格発表 基礎学力問題②	第2回プレカレッジ 基礎学力問題③と④	入学式 基礎学力試験 大学基礎演習	宿泊研修		
						図書館ツアー 指導主任との面談		

初年次教育は「導入教育」¹⁾とも呼ばれている。類似の用語に「リメディアル教育」という言葉もある。前者は「青年心理学上の移行期をスムーズに転換していくための支援」(山田2005)、「この間まで『高校生』だった新生を、学習能力や意識の上でも『大学生』と呼べる存在に導く教育」(藤田2005)などと定義されている。一方、後者は「大学入学前に習得しているはずの学習内

容を入学後に補習することを指す」(藤田2005)、「『高校卒業程度の学力』を確実に身につけることを目的とした教育」(濱名2004)と言われている。厳密には異なるものであるが、本学科の初年次教育は「初年次・導入教育」と「リメディアル教育」を統合したものと定義して研究を進める。

¹⁾ 「導入教育」は、山田礼子が First Year Experience の授業形式の一般的な名称である Freshman Seminar (First Year Seminar) を「導入教育」と和訳したのが始まりだといわれている (濱名2004)。

3. スタディ・スキル

毎年、大学や短期大学に入学する学生のなかには「学生としての素質」の欠如から、学生生活に入るまでに多面にわたって大学生としての準備教育を必要とされる入学生の存在が問題となっている。これは全国的にも共通課題として、平成20年「初年次教育学会」が創設され（玉川大学）、平成25年度は第6回大会が金沢工業大学で開催された。

大学では高等学校以上の学習能力が求められるのは当然であるし、人文・社会科学系でも論文やレポートを作成するためには多くの文献を読まなければならない。近年は、プレゼンテーションやディベートなど、学生にとってはこれまで以上に多くの表現の機会が存在するとともにその能力が必要とされている。

本項では、学生がそれらに対峙する能力としての「スタディ・スキル」について、その本質と能力養成の観点から考察を加える。

3-1. スタディ・スキルの本質

3-1-1. スタディ・スキルの存在感

高校卒業生の、大学・短期大学への進学率は、文部科学省「学校基本調査」では、平成23年度56.8%（男子57.3%、女子56.2%）となっている。昭和30年度10.1%や昭和50年度38.4%（男子43.6%、女子32.9%）に比べると大幅な上昇である。

高校生の半数以上が進学する今日、大学生の量の増加とともに、質の低下が危惧されている現状がある。学校教育法第83条では「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」と、大学の教育目的を示している。大学生は、入学して卒業まで、自らが選択した学問領域を自らの学習と努力によって修得しなければならない。その修得能力こそがスタディ・スキルなのである。

3-1-2. スタディ・スキルの必要性

①「学生」と「生徒」

大学生は「学生」、高校生と中学生は「生徒」、小学生以下は「児童」と呼ばれているが、思考も行動も生徒のままの大学生が増加している。大学・短大は、高校卒業程度の基礎学力を修得していることを前提に、高度の学問分野への導入を図るが、彼らにとって、大学・短大は、中学校と同じように、与えられた環境で、与えられた課題を、与えられた方法で解決している学問の場に過ぎない。個々の学生にとって、高校から大学、すなわち「生徒」から「学生」へのスムーズな橋渡しこそがスタディ・スキルの必要性である。

②「ゆとり教育」との遭遇

詰め込み中心の知識重視型の教育から、経験重視型へ教育方針が変更されたのが「ゆとり教育」である。一般的に、その開始は、平成4（1992）年度からと平成14（2002）年度から施行された学習指導要領の実施時期と異なる見解が示されている⁽²⁾が、いずれにしても、現代の大学生は、ゆとり教育の学習指導要領による教育を受けた世代である。ゆとり教育＝学力低下を実証するものではないが、有識者からそれを原因とする指摘と批判がなされたのは事実である⁽³⁾。

③高校時代と大学との学習時間

ベネッセ教育総合研究所の調査では⁽⁴⁾、「高校時代学習時間が長くても大学での学習時間も長いとはいえない」ことがわかる。高校3年生9月時点での授業時間以外の学習時間は、1日平均148分であったものが、大学入学後は、1週平均2.8時間（1日平均約24分）となっている。指定校推薦入試やAO入試の受験生の場合は、全体平均より高校時代の学習時間は少なく、1日平均79分で、大学生になってからは、1週平均で2.6時間（1日平均約22分）である。学習時間と学習意欲との相関性を断じることができないが、「深く専門の学芸を教授研究」すべき大学での学習時間が減少している現実

⁽²⁾ 小学校は1992年度、中学校は1993年度、高等学校は1994年度から施行された新しい学習指導要領（・新学力観を導入・学習内容及び授業時数の削減・小学校の第1学年及び第2学年の社会及び理科を廃止して、教科「生活」を新設）。小中学校は2002年度、高等学校は2003年度から施行された新しい学習指導要領（・学習内容及び授業時数を3割削減・完全学校週5日制の実施・「総合的な学習の時間」の新設・「絶対評価」の導入）。

⁽³⁾ 立命館小学校副校長の蔭山英男氏によるゆとり世代の3つの特徴「(1)周囲の人間や社会に対する不平不満、批判が多く、問題を人や社会のせいにしがち、(2)『物事はうまくいって当たり前』と考えるため、少しでもうまくいかないと自信を失ってしまう、(3)それでいて、『このダメダメな状況を一気に解決する夢のような方法がどこかにある』と信じている」（『週刊ダイヤモンド』2008年4月16日）。

⁽⁴⁾ 「第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書（2012年）」

看過できない事象であり、初年次教育を通してスタディ・スキルの養成に取り組むべきである。

3-2. スタディ・スキルの構図

本稿は、高校生から大学生への円滑な移行を目的とし、「初年次教育」の観点からそれを考察するものである。大学生とは、自分で考え自分で学習する能力を備えているべきであり、それは高校卒業までに培われた基礎学力のうえへ、大学生としてのスタディ・スキルとスチューデント・スキルの構築を旨とするものである。高校生までの学習は、学校指定の教科書に則した授業を受け、その範囲内の事実をどれだけ理解し知識を深めることができるか、ということであり、その理解の程度が評価の基準となるものである。

大学での講義は、指定された文献を読み、理解するだけではなく、それについて自らの考察を展開しなければならない。考察の展開とは、与えられた課題や自ら求める研究の領域に必要とされる知識を広げるために、さらに多くの文献に接し、それらを読み解いて自らの考えを発表し議論することである。

3-3. スタディ・スキルの養成

学生としてのスタディ・スキルの養成は、自ら展開する議論の内容が、真理を追求し合理性のあるものでなければならない。発表する論文やレポートは真実や理論に合致したものであって、随筆や感想文のような根拠の証明を必要としない作文であってはならない。そのために「聴く」「読む」「書く」「話す」のそれぞれの項目について着目し検討を加えたい。

3-3-1. 「聴く」

広辞苑（第六版）で「聴く」とは、一般的な「聞く」よりも注意深く耳を傾ける場合をいう。したがって、講義中の行動はまさに「聴く」である。少なくとも街の騒音や他人の話し声が無意識のうちに耳に入る、聞こえるというのは「聴く」ではない。スタディ・スキルとしての「聴く」とは、講義内容や識者の話に傾注し、自らの知識を広げる糧とするのみにとどまらず、自分の論理を展開する際の根拠として活用しなければならない。そのためには、次の4点が必要になる。

①聴く前の準備

受講する内容の予測がつかない場合より、予め概略なり方向性がわかっていた方が集中しやすいし理解することができる。いわゆる予習である。前回の

復習であっても、内容を見直して講義に臨むことは、それまでの内容との関連性の把握に役立つことになる。

②話者との距離

話す人と聴く人の距離と、話題への注意力は反比例する。両者の間が離れれば離れるほど、音量が低下し聴き取り難くなることはもちろん、話者の表情や雰囲気をつかむことも困難になり、集中力が低下した「聴き方」となる。したがって、効率の良い授業成果を実現するためには、できるだけ前方の座席で受講することは言うまでもない。

③ノート・メモの作成

聴きながらノートを執ることは、講義時間の中で重要な作業である。それは講義内容の正確な把握と、復習を含め、見直す時の貴重な資料となるからである。講義は、いろいろな方法で実施される。テキストを使用し、それに沿って進められることもある。口頭中心で行われる場合もある。パソコンを使ったパワーポイントも珍しくない。重要な項目がすべて板書されるとは限らないのである。講義の進行する中でノートを執ることは、決して容易なことではないはずである。ノートすべき項目と内容を即断しながらまとめていかなければならない。後日、講義内容を見直し整理するとき、ノートの執り方によって復習の効果に差が出ることになる。講義以外の場所で関連ある事項に出会ったとき、それをメモして資料として活用することも重要である。

④聴いた後の処理

聴いてもわからないことがある。それは「質問」という行為で空白を埋めるべきである。とくに専門的分野や未知の領域においては、聞いただけでは理解できない内容が多い。当然である。しかし、わからないことを放置しておく、その後の方向性を誤る可能性が高い。「ここの意味がわかりません」でもいいし、「ここはこう理解していますが、間違いでしょうか」という質問の方がさらに的確な情報を得ることができる。講義の直後、あるいは機会をみて質問し、知識の空白を埋めておくことは重要である。

3-3-2. 「読む」

「文字・文書を見て、意味をといて行く」ことを「読む」という（広辞苑）。読むという行為の対象は専門書に限らず、雑誌であり新聞であり、文章に触れて、その内容を理解することである。その場

合、筆者の主張に同意するかしらないは関係なく、読むということの目的は、読むことによって自らの知識を広げることである。

①本を探す

テーマに沿った文献を探すことは、論文やレポートの作成のうえで最も重要な作業である。その方法としては、指導者による参考文献の提示や、図書館や書店、最近ではインターネットによる検索も有効である。方法としては、関連する文献を手当たり次第に読み（いわゆる乱読し）、その中からテーマへの接近を図ることもできるが、ある程度テーマから導き出される項目（アイテム）を追求することによって全体の構図を導き出す方が一般的である。

②本を読む

本を読むことの目的は、筆者の主張を理解し、自らの知識を広げることである。批判的考え方を持つことも必要であるが、大切なことは内容を吟味し取捨選択を繰り返しながら読み進めることである。重要な事項にはマーク（自分の本で、それが許される場合）したり、メモを取っておけば、自分の論文やレポートの参考資料として活用できる。テーマによって同一ではないが、研究分野によってはその内容（真理や理論）が変化し、古い主張が現代に適さないこともある。しかしながら、先人の主張や前代の理論を無視することは好ましくない。双方の比較の中に納得できる内容を発見することは多い。

3-3-3. 「書く」

「文字をしるす。文に作る。著作する」ことを「書く」という（広辞苑）。論文やレポートなどにより自分の考えを発表することであり、自己表現というスタディ・スキルの根幹をなすものである。文章を書いて読んでもらう。これには多くの事態が考えられる。例えば手紙を書く、就職活動関係の書類（履歴書やエントリーシートなど）を書く、最近ではツイッターやブログでも自分の考えを表現することがある。しかし、本稿の主旨とする「書く」とは論文やレポートのことであって、そこにはいくつかの規則が存在している。

また、「描く」という書き方もある。これは、ひとつのテーマを文章として表現するのではなく、絵や図で描くことにより、そこから派生する事項を次のステップに展開することによって全体としての構

図を完成させるのである。本学科では「マインド・マップ」として活用されている。それは、イギリス人トニー・ブザンが考案した新しいノート法、あるいはアナログ的な情報処理術である⁽⁵⁾。マインド・マップの効果は、1) 描く場合には情報を整理でき、2) 描いたあともさらなるアイデアを発想したり、問題点の発見や解決につながること、3) 絵や図として見るので学習や記憶の促進になること、4) それをコミュニケーションやプレゼンテーションの準備に活用できる、などの利点がある⁽⁶⁾。これらは、講義にはもちろん、就職活動における自己分析や自己PRなどにも役に立つものである。

3-3-4. 「話す」

「話す」とは「言葉でつたえて広める。口で述べる。語る。告げる」ことである（広辞苑）。自分の考えや意見を他に伝える、表現するという意味では書くことと変わらない。したがって、話すことは真実と異なる内容であってはならない。裏付けのない内容は、口から出まかせのウソであり、聞く側からも相手にされない。書くことと違うのは、一部の場合を除いて、それは双方向性で行われるということである。発言に対して、質問という形で返ってくる。友達と話す場合、先生と話す場合、就職活動で選考担当者や話す場合がそうである。そしてその反応が、必ずしも自分の考えや主張と一致するとは限らない。その場合は、自分の主張を論理的に説明することが必要となる。

具体的例としては、教室やゼミの中で、新しいクラブ活動の中で自己紹介を求められることがある。就職採用試験の口頭試問でも自分を主張しなければならない。このような場合、前述のように真実を述べることは当然であるが、書く場合と違って、音量も含めて明瞭な発声が必要となるし、相手が聞き違えることもある。また、独りよがりの内容では相手に関心を示さないこともある。

「話す」ということは、相手の反応を見ながら答弁に自信のある内容を、真実に沿って相手に伝わるよう意志の伝達を言葉で行うことである。

初年次教育の一端としての「スタディ・スキル」の養成が不可欠である、ということはすべての大学・短期大学の共通認識となっている。今回、「初年次教育学会第6回大会」に出席して、他大学における画期的な取り組みは大いに参考になるし⁽⁷⁾、本

⁽⁵⁾ 本学科「大学基礎演習」（2013年4月15）講義レジュメ（酒見康廣）。

⁽⁶⁾ 同上。

⁽⁷⁾ 取組みの例としては、司書による授業参加（北陸学園大学短期大学部）がある。これによって文献の検索に慣れ、図書館の利用が増えた。また、国際基督教大学の上級生によるサポート（履修相談・学内家庭教師）も参考になる。

学科においても採用に向けて検討価値のあるものである。

しかしながら、本学科において現在、初年次教育として開講されている「大学基礎演習」は、その実施時期や方法・内容に関しては、決して他大学に後れをとったものでなく、近年になって科目化する大学が多い中⁸⁾、むしろ先進的取組ではないかという認識を得た。とはいえ、今後ますます多様化する学生の素養と、かれらにとって有意義な学生生活あるいは将来を見据えたキャリア教育の有効性の実現のため、「スタディ・スキル」の養成をはじめとして初年次教育の必要性は今後ますます高まるものと思われる。

4. スチューデント・スキル

平成24年3月の中教審による「審議まとめ」で、大学での学びを「学習」ではなく「学修」と表記を改められたことで、生徒ではなく学生としての主体性、自律性、創造性がより明確に意識されるようになった。また、それに対する大学としての体制作り、あるいは個々の授業においてアクティブラーニングを取り入れるなどの工夫がさらに求められている。

大学における初年次教育の普及は浸透してきており、朝日新聞と河合塾の共同調査による「2013年度調査結果報告」のデータに基づけば、大学での初年次教育の実施率は84%になっている。また、初年次教育の啓蒙期（第1ステージ）から実践活動期（第2ステージ）へと突入したとされる今日、その内容にも変化が表れてきている。杉谷（2008）によれば、スタディ・スキルに関する内容が主であったのが、スチューデント・スキルに関する内容が増えてきているという。

スチューデント・スキルは、学修活動や学園生活に対する心構え・意欲・態度・常識、さらには将来への進路設計など、広範囲な内容を指しており、各大学によって対象とするその具体的な事項は異なっている。筆者らは、スチューデント・スキルとして考えうる事項を次のように挙げてみた。

- a) 生徒としてではなく、学生としての自覚を持って行動し責任を持つことができる。
- b) 本学科の教育目標を理解し、在学中の学修計画を立てて、それを実行できる。

- c) 主体的、積極的な行動・発言・態度を取ることができる。
- d) 継続的な学修習慣とそのため時間管理・健康管理ができる。
- e) 将来の自立化、および自律化に向けた設計ができる。
- f) 自らの状況や能力を客観的に自己分析・自己評価でき、新たな達成目標を設定することができる。
- g) 学修する場にふさわしいマナーに基づく行動と態度を取ることができる。
- h) 一般社会人とは違って、若さと時間的余裕を生かした行動・体験をして、それを将来へ生かすことができる。
- i) 自己の価値を高めるためのキャリア形成の努力をすることができる。
- j) チームワーク学修による協調性を発揮できる。
- k) 物事の疑問点や問題点を発見し、その所在を明確化することができる。
- l) 答えが一つではない解決策や対応策を模索し提示することができる。
- m) 本学の建学の精神や学園の歴史への認識を持ち、行動・態度へ反映することができる。

4-1. 本学科の対応と学生の現状

本学科の教育目標は大きくは基本的知識、基本的技術、基本的態度・習慣の3つの項目からなり、それぞれの項目に目標としての事項が5個前後ずつある。ここで、基本的技術がスタディ・スキルに相当し、基本的態度・習慣がスチューデント・スキルに相当するといえる。(a)~(m)の各項目について、本学科としては、入学前教育の「プレカレッジ」、新入生オリエンテーション、新入生宿泊研修、「大学基礎演習」、「キャリア形成演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、キャリアサポート講座、さらにその他の授業科目で程度の差こそあれ、一定の対応を行ってきた。

とくに、項目(g)に関しては、本学科が初年次教育「大学基礎ゼミ」をスタートさせた平成12年度よりもさかのぼった時期からマナー教育には力を入れてきた。平成13年度に本学科では他学科に先駆けて「学園マナー」を作り、挨拶による礼儀の大切さから、授業開始と終了時の一斉挨拶を実行し、廊下等でのすれ違い時の挨拶を奨励してきた。平成13年度にそれまでの制服が廃止されてからも、スーツの着こなしは、普段の習慣からということで週

⁸⁾ 「キャリアデザイン」「キャリア開発セミナー」「キャリア教養講座」「修学基礎A・B」「キャリアプランニングⅠ」「キャリア形成」などの科目名で開講されている。

一度のスーツ着用の日を設けてきた。単独学科での指導の限界を感じていたが、平成23年度から短期大学部3学科で共通の学園マナーブックとして「Manner Book Nakamura Style」が作成され、平成25年度からは大学の3学部にもマナーブックが配布され、キャンパス内での共通指導事項となった。これは項目(m)とも関連することであった。

しかし、スチューデント・スキルを改めて意識したとき、スチューデント・スキルについての学生の修得状況ははなはだ不十分であり、本学科の対応も不十分なままであることは歪めない。項目(a)~(m)の中で、本学科の学生にとって弱点ともいえる部分、あるいは学科としての対応が遅れている部分は、項目(c), (j), (k), (l)である。また、ある程度はできてはいるが、もっと力を入れるべき部分は、項目(a), (b), (i)である。

4-2. 今後の対策

本学科が今後さらに対策が求められる項目(c), (j), (k), (l)については、専門教育も含めたカリキュラム全体で対応すべき内容ではあるが、ここでは初年次教育の立場で考えてみる。

項目(c)については、本学卒業生が、素直ではあるが自主性に欠けるという指摘を企業側から受けることがよくある。自主性・主体性の涵養のために、新入生宿泊研修の内容や運営を1年生自身に任せることが考えられる。あるいは2年生を一部加えて実施することも有効であるだろう。もう一つ考えられるのは、ゼミナールガイダンスのときの先輩ゼミ生の動員である。

項目(j)については、初年次教育としてはあまり取り組んでいない部分である。プレカレッジにおいて学生(入学予定者)をグループ化して、何らかの課題を課すことが考えられる。これは友達作りも兼ねることになる。

項目(k)については、何らかの問題点の探求をする作業は学生にとってはかなり弱い部分である。初年次教育としては新聞記事のスクラップ帳の活用が考えられる。単に記事を切り抜くだけでなく、記事の背後に潜む問題点について自分なりのコメントを記述させるのである。

項目(l)については、学生は、答はひとつという学習環境の中にいたため、いろいろな解答あるいは解決策の中から自分独自のものを見出すという訓練がなされていない。他人とは同じではない解答となるレポート作成を取り入れることが考えられる。

5. 基礎学力

大学生の基礎学力の低下が言われて久しい。戸瀬・西村(2001)では数学の学力を大規模調査しているが、国公立・私立大学、理系・文系を問わず、大学生の数的理解力の不足が報告されている。また、新卒採用の選考中に学生の「学力不足を感じることがあった」という企業は8割近くに達している(平野2011)。もはや、大学生の基礎学力低下・不足は一部の大学生の特殊な問題ではない。

本学科においても、基礎学力の低下と多様化を担当教員は肌で感じてきた。まとまった文章が書けない、誤字、漢字が読めない、貧弱な語彙、簡単な計算・文章問題が解けない、中学1年生レベルの英単語が書けないなど、個々に散見されている。もちろん、この現状レベルに合わせて授業を行うというのも対応策のひとつだろう。しかし、これは近視眼的すぎないだろうか。教育の質の低下は本学科を最終学歴とする多くの学生の進路を暗くし、また本学科の社会的評価を脅かすことにもなる。

5-1. プレイメントテストの実施

実は本学生の基礎学力を客観的に測るデータは存在しないのだが、推し量る材料はある。「実務英語I」(1年次前学期・選択科目)に関連して、1年次7月にTOEIC Bridgeを実施している。過去7年間の平均点はほぼ横ばい状態で低下は見られない。ただ、これは全員が受験したわけではなく、英語が苦手な学生は受験していない可能性がある。

また、「数学」(1年次後学期・選択科目)の授業内で行った小テストでは11H生(平成23年度入学生)と12H生(平成24年度入学生)ではそれぞれ49.0%と37.9%と平均正答率が落ちている。ただし、こちらも「数学」受講者であることで全体像を明らかにするには至らない。

本学科の教育活動に、あるいは就職活動、卒業後の職業を含めての生活にとって、どれほどの基礎学力を必要とするのか、スタディ・スキル、スチューデント・スキルとの相関性など判断は難しい。しかし何より、学生の基礎学力の把握が、議論の第一歩だと考える。

そこで、入学直後に「プレイメントテスト」を実施することも一案だ。目的は学生の基礎学力を正確に把握することである。それは、一定の基礎学力に達していない学生への指導、総合的な学生支援のための基礎的データへと活用ができる。

試験内容は、「日本語」「数学」「英語」の3科目とし、それぞれ20分程度で、ごく基礎的な内容を

問う問題とするのはどうだろうか。試験内容、作問、採点、結果のデータ分析・管理については基礎教育センター⁹⁾との連携を模索する。

5-2. キャッチアップ講座の実施

「プレースメントテスト」の結果として基礎学力が著しく低いと認められる学生に対しては、数回の補習授業である「キャッチアップ講座」を行うことも考えられよう。時期はプレースメントテストが終了後の4～5月で、日本語・数学・英語それぞれ行う。学生によっては複数の科目のキャッチアップ講座を受講しなければならないことになる。

回数は3回程度が想定できる。基礎学力育成には少ない回数に思われるが、本学科では4月から「キャリアサポート講座」(秘書技能検定2級)が行われており、時間割上もまた学生(特に基礎学力の低い学生)には負担感が増す恐れがある。例えば回数は少なくとも、大学入学後に、それまでの学習を振り返りができることも、初年次教育の役割のひとつだろう。キャッチアップ講座の受講は「大学基礎演習」の単位修得の必須条件とすることで、出席と動機づけを促す。キャッチアップ講座の内容・実施について基礎教育センターとの連携を強める。

5-3. 基礎学力のボトムアップ

キャッチアップ講座は、基礎学力の低い学生を対象とした補習授業であるが、同時に、学生の基礎学力の底上げ(ボトムアップ)も課題である。

本学科では平成21年度(10H生対象)より、推薦入学試験合格者対象(12月)と推薦・一般入学試験合格者(翌年3月)を対象に入学前教育の一部として、平成23年度(12H生対象)より「基礎学力問題」というプリントを作成し、推薦・一般入試合格者に解答と提出を求めている(図表3参照)。

平成24年度(13H生対象)の場合は、「国語」「数学」「英語」「社会」「一般」(学科でオリジナルに作成)である。提出日は4回に設定しており、12月、1月、2月および3月である。提出日を分けることで、学習習慣の維持あるいは身につけて欲しいという意図がある。提出方法は、郵送またはメール添付としている。また、入学後には就職活動用の参考書『一般常識クリア問題集』(成美堂)を

使い、「大学基礎演習」時に範囲を決めて、確認テストを行っている(2回)。結果は学生に返却している。

このような課題や試験は、学生の基礎学力の不足を教員が認識し、その対策として開始したものであるが、効果の検証ができない。また、単発的なもので、その後の継続(フォローアップ)がほとんどできないという難点もある。解消方法のひとつとしてはe-learningの活用が考えられるが、具体的な検討段階には入っていない。今後の課題としたい。

e-learningの前段階として、より費用もかからず、学生も手軽に開始できるスマートフォンの無料アプリの活用が、当面、より現実的であろう¹⁰⁾。

本学科平成24年度入学生162名および平成25年度入学生170名を対象に、スマートフォンに関するアンケートを実施した¹¹⁾。回答を得られた230名のうち、スマートフォンを所持している学生は225名であり、ほとんどの学生が身近な機器として扱っていることが分かる。また、現在使用しているOSについて尋ねたところ、iOS113名(50.2%)、iOS以外(Androidなど)110名(48.9%)、未回答2名(0.9%)という結果となった。iOSとiOS以外のOS利用者数に大差はないが、今回はiOS無料アプリを取り上げ表にまとめた(図表4)。今後は無料アプリの精査を進め、教員からの推奨として学生に紹介することができるか否かを検討のひとつに加えたい。

基礎学力は、入学後のスタディ・スキル、チューデント・スキルの習得の土台となる。大学でのより良い学業成果、そして将来の望む進路(就職、編入)にも影響を及ぼす。学生の基礎学力確保に向けて、新たな初年次教育プログラムに着手した

図表3 入学前教育(基礎学力)

年度	対象学生	課題 (基礎学力問題)
平成21(2009)年度	10H	行わず
平成22(2010)年度	11H	行わず
平成23(2011)年度	12H	3回提出
平成24(2012)年度	13H	4回提出

⁹⁾ 基礎教育センターは学生の学習を支援するために、2013年4月に設立された。

¹⁰⁾ 空いた短時間に、スマートフォンやタブレット端末を使い学習する人が増加している。欧米ではスナック菓子を食べるほどの短い時間を活用する学習という意味で「スナックラーニング」と呼ばれている(『日本経済新聞』2013年9月21日朝刊)。

¹¹⁾ 大塚絵里子・梶田鈴子「短期大学のスマートフォン利用の現状分析」(2014発表予定)。

図表4 活用可能な iOS 無料アプリの例

学習科目	アプリ名	内 容
英語	TOEIC® 英単語カード2000 (Minghua Hu)	TOEIC600点、730点、860点とスコア別、単語別・レベル別の英語学習ができる。テスト機能もあり理解の確認が可能である。
英語	英語力 UP 英単語8000語 (xudong zou)	TOEIC や実用英語技能検定 1 級など 8 種類の試験からの単語を学習することができる。個人の単語帳を作成でき、テスト機能もある。単語の発音を聴ける点が優れている。
日本語	スライド四字熟語 (Ideaman's Inc.)	表示された漢字の中から四字熟語を見つける。意味の確認もできる。保存機能もあるので、未知の熟語のくり返し学習に適している。
日本語	漢字ドリル 3 高校・一般 (nicolet)	基本的な漢字の読み方を入力していく。くり返しができ、保存機能もある。
数学・計算	100マス計算 (Masato Takahashi)	たし算・ひき算・かけ算、四則演算の100マス計算ができる。計算スピードの向上につながるのではないかと。

い。

6. おわりに

小学校から高校までの最新の学習指導要領では、授業時間数・教科内容ともに増加し、「ゆとり教育」からの脱却は明白になっている。これで大学生の質の低下に歯止めがかかると考えるのは、あまりにも楽観的・短絡的すぎるであろう。大学生の質の低下、そして多様化を、大学教育への所与の命題と位置づけて、真摯に向き合うことが大学、そして教員に求められている。初年次教育の存在意義のひとつがここにある。

本稿では初年次教育を「スタディ・スキル」「スチューデント・スキル」「基礎学力」の3点から検討を行った。これら3つは初年次教育の重要な要素として、平成26年度からの「新初年次教育プログラム」で具現化していく予定である。ただし、本議論が本学科の初年次教育の方向性を決定するものではないことを申し添えておく。

最後に、未検討の課題として「入学前教育（プレカレッジ）」をあげておく。本学科の初年次教育期間には、入学前の高校時代も含まれると上述したが、この点については本稿では言及していない。まず、入学後の効果的な初年次教育の確立を第一歩にと考えたからである。しかしながら、入学前教育（プレカレッジ）も、本学科の初年次教育の重要な要素であることは忘れてはならない。本学において、平成24年度に立ち上がった「高大接続教育研究会」などで高等学校との議論を参考にしながら、入学前教育（プレカレッジ）にも力を注ぐことを課

題とする。

【引用・参考文献】

- 天野明弘 (2008) 『スタディ・スキル入門』有斐閣ブックス
- 鮎川二郎他 (2010) 『学生のためのキャリア形成と就職成功へのステップ』実教出版
- 伊藤茂樹 (1997) 「大学生は「生徒」なのか—大衆教育社会における高等教育の対象—」『駒澤大学教育研究論集』第15号 85-111
- 石井一成 (2011) 『大学生のためのレポート・論文の書き方』ナツメ社
- 今野雅方 (2011) 『考える力をつける論文教室』ちくまプリマー新書
- 杉谷祐美子 (2008) 「初年次教育「第2ステージ」へ—実践と結びついた研究への期待—」『アルカディア学報』2321号
- 寺崎里水 (2010) 「大学生の「学力」と「成績」—確かな学力を基盤とするキャリア形成支援にむけた基礎的検討—」『福岡大学研究論文集A10』第1号 35-41
- 戸瀬信之・西村和雄 (2001) 『大学生の学力を診断する』岩波書店
- 日本リメディアル教育学会 (2012) 『大学における学習支援への挑戦：リメディアル教育の現状と課題』ナカニシヤ出版
- 濱名篤 (2004) 「大学生にとっての円滑な移行（シンポジウム2 日本における初年次教育の構造を考える）」『大学教育学会』26(1) 37-43
- 平野恵子 (2011) 「企業からみた学力問題—新卒採用に

おける学力要素の検証』『日本労働研究雑誌』53(9)

59-70

藤田哲也（2005）『初年次教育の目的と実際』『日本リメ
ディアル教育学会第1回全国大会講演資料集』

古都廷治（1992）『論文・レポートの文章作法』有斐閣
新書

松本茂他（2013）『「読む・書く・プレゼン・ディベ
ート」の方法』玉川大学出版部

山田礼子（2005）『一年次（導入）教育の日米比較』東
信堂

山田礼子（2007）『初年次教育ハンドブッケー学生を
「成功」に導くためにー』丸善